職員支える態勢強化を

知的障害者施設家族会
全国大会が開幕

福岡市

全国知的障害者施設家族会連合会の大会が18日、福岡市博多区のホテルで開幕した。7月に相模原市の「津久井やまゆり園」で19人が刺殺された事件について、由岐透理事長は「この世に生まれる必要のない人間はいない。容疑者のような間違った思想の持ち主が二度と現れないよう社会のひずみを正していかなければならない」と呼び掛けた。

連合会はやまゆり園を含む534施設の入所者の家族会（計3万7921人）で構成。全国大会は交流と勉強のために2005年から毎年開かれ、今年は約650人が参加している。

冒頭に全員で黙とう。基調講演で、北九州市立大の小賀久教授は「障害者はいない方がいい」との容疑者の考え方は、社会に潜む優生思想の表れだとして「障害者を大切にする社会は全ての人を大切にする社会だと家族が確信を持って訴え掛ける必要がある」と提案した。大会は19日まで。

福岡市で開幕した全国知的障害者施設家族会連合会の全国大会＝18日

全国大会の会場には事件現場となった「津久井やまゆり園」の家族会会長、大月和真さん(67)の姿もあった。大月さんは西日本新聞のインタビューに応じ「家族は少しずつ気持ちに区切りを付け、前に踏み出し始めている。事件を繰り返さないよう、施設で働く人を支える相談態勢の強化なども必要だ」と語った。

大月さんが報道機関の個別取材に応じたのは初めて。重度の知的障害があり、18歳で入所した大月さんの息子、寛也さん(34)は事件当時、容疑者が立ち入らなかった棟にいて助かった。直後を自宅で過ごしたが「事件のことはとても説明できなかった」。園に送っていった妻から、施設になかなか入ろうとしなかったと聞いた。「血のにおいなど、いつもと違う様子を感じ取ったのかもしれない」

「やまゆり園」家族会
会長の大月さん

生活は一変した。「これまで全く注目されなかった子どもたちや家族が、一気に世間の関心の的になり、私たちは『生活をどう守るか』と必死だった」。マスコミ取材の殺到に加え、店舗を経営する家族は「あんたのとこ大変やったね」と客から度々言われ、仕事が手に付かなくなった。

大切な子どもやきょうだいを突然奪われた悲しみや無念さに加え、容疑者は元職員という事実がいっそう家族を苦しめた。園を度々訪れていた大月さんは、職員のレベルは高いと感じていただけにショックだった。「園で働くうちに『障害者はいなくなればいい』との考えを強めたのだとしたら、なぜそう思ったのか…。現場に、しっかりフォローする人間がいれば違ったのかもしれない」

9月中旬、家族会として園の建て替えを神奈川県に要望した際、職員の待遇改善や相談態勢の強化なども併せて求めたという。「福祉は人が宝なのに、全国的に待遇が低く、モチベーションを支える仕組みもない。事件を教訓にしてほしい」と大月さんは話した。

（下崎千加）